



★ 第3回 プレ・アミュー展
こどもと高齢者の合作・“三つ編み星月夜”が出来ました！



雲はうずまき、星はぐるぐる、ひかる三日月、ゆらゆら糸杉、どっしり教会。
みんな、みんなで作ったみんなの三つ編み作品。
皆さんの編んだ一本一本がどんな形になったか、見に来てください。
チェロでも聞きながら、コーヒーもどうぞ！



夜勤スタッフさん！脅かしてごめんなさい。私はフィンセント・ゴッホです。きみどりの皆さんにお会いできて光栄です。私をもう一度見直してくれるというので遊びに来ました。こんな形で作品を再現して呉れるなんてびっくりです。玄関ホールに来て私とお話でもしましょう。待っています！

前略

Aさん、体調は如何ですか？映画「永遠の門」に行ってきました。印象深い映画でした。ご一緒出来なかったのが残念でした。以下、私のメモです。混乱したままですが、忘れないうちに、記しておきます。

- ① 途中から、感じ始めていたのですが、揺れるスクリーン画面が多いことでした。客観的な伝記映画ではなく、できるだけゴッホの視点から、世界を語らせようとした為でしょうか。ゴッホの気持ちが高揚すれば、するほど揺れていました。心の揺れがそのままスクリーンに投影されているようでした。
- ② 内容ですが、ゴッホは自分の人生は何の為にあるのか、何の為に絵を描くか、はっきりと話していました。サン・レミの聖職者に、伝道師としての使命感のようなものを。そして“アイリス”を描いている時の女性への返事「自然の花は枯れる。しかし私の花は枯れない」「未来の人々へ描いているのだ」「神が宿る自然」を伝えることが自分の使命と。スクリーンの中で、好意的な質問に対しては丁寧に応えています。落ち着いて、明晰に。ジヌー夫人にも、医者に対しても。しかし、他方では特に自分を疎み、排斥しようとする者たちへの揺れ動く精神と反撃と奇行。
- ③ 映画は「天才か狂人か」という構図から離れて、迷い、苦しむ普通の、ただの人間として描いていきます。鬱、アルコール依存、梅毒、狂人、自殺、自傷様々な偏見を超えて普通のただの人間として描いていきます。彼を疎ましく見る世間には、「狂人」と映り、理解しようとする人々に対しては普通の使命感を持った人と映る。歌謡曲ではありませんが、「みんなは悪い人だというのが、私にはいい人だった」というフレーズを場違いにも思い出してしまいました。自殺説を退け、又最期に映し出されていくゴッホの「彼のこころは健全であった」という手紙(メッセージ)は人のあり様は現象だけでは測り知れないのだと言っている様にも思え、ほっとしました。(字幕が早くて勘違いしたかも・・・)
- ④ 「ゴッホは〇〇症」という病理学的気質的分析には興味はないけれども、精神のバランスの悪さ(世間との軋轢)を感じている人(々)と、私達の介護職場におられる認知機能の不自由さ故に、「不安」をベースとする生き辛さを抱えた方が重なり、それがゴッホに惹かれる点でもありました。そうした方々も私達と程度は異なるけれども、快と不快を感じるころ・同じ内面世界を持つご同輩です。私たちが「何故ゴッホなのか？」を書いた時とは違う、もう一つの理由がここにあったのです。課題は精神を病んでいる(?)人々の希望と私達の好意的理解は如何にして可能か？です。ある障がい者は言います。「僕は少しも不自由ではない、社会が不自由なのだ」と。ヒントになるでしょうか？
- ⑤ 長くなりました。最後に、2点ばかり。沢山のゴッホの作品が映しだされていましたが、“永遠の門”という題にもかかわらず、その本題である「悲しむ老人」の作品がなかったのはちょっと残念な気がします。そして最後の場面で、お棺の中のゴッホには目もくれず、遺体の周囲に並べられた絵を品評して回る人々がスクリーンに映り出されます。映画監督は何を訴えているのでしょうか？

それでは又。寒さが増してきました、一層のご自愛を！

草々

※一度限りのきみどりグリーンクラブが総会で歌った曲。歌詞の問合せが有りましたので紹介します。



乾杯の歌 (ドイツ民謡)

盃をもて さア 卓を たたけ
立ち上がれ 飲めや 歌えや もろびと
祝いの盃 さア なつかしい
昔のなじみ 心の盃を

- 飲めや歌え 若き春の日のために
- 飲めや歌え みそなわす神のために
- 飲めや歌え わが命のために
- 飲めや歌え 愛のために ヘイ



クリスマス
スイーツパーティー
12月25日 PM3:00
パティエ・外村さん実演
乞う ご期待！

